

走ることの意味2

Introduction

今回の年末年始に郷里へ帰り、学生時代の友達と会って昔の思い出話をしていたら、高校時代の辛かった陸上部の練習のことを思い出した。何か急に懐かしくなって、久しぶりにそのランニングコースを走ってみた。

山あいの斜面をアップダウンするそのコースは、今の私にはとても苦しくて、途中何度も立ち止まりながら、息をはずませた。木枯しは、頬を刺すように痛い。走る事はストイックな自慰行為ではないかとさえ思えてくる。しかし走っているうちに、学生当時にはなかった景色を見ては新鮮な気分になったり、昔のままの風景を見ては妙に安心したりした。気が紛れるというのだろうか。その間は苦しさも忘れていたほどだ。

そういえば最近、余り走っていない。市民ランナーの中には通勤ランを日課にしている人も多いのに、忙しいことを理由にサボっているのだ。案の定走った翌々日には筋肉痛に悩まされた。「翌日には出ないんだ」と自分の体力の衰えを実感しながら、しばらく暗い気持ちに浸る。

このまま冴えない中年おやじになってしまふのかと思い始めた時、たまたま一冊の本を読んで気分が和らいだ。『マラソンランナー』（文春新書、後藤正治著）という本だ。

この本は、金栗四三や君原健二といった、日本の歴代マラソンランナーの軌跡を綴ったドキュメントである。戦争や政治に翻弄されながらも、走ることの素晴らしさを体現した彼らの生き方に、素直に共感を覚えた。彼らのようなトップアスリートには成れないが、「スポーツオヤジ」として生きること、生活に張りとう潤いが持てたら、どんなに幸せだろうかと思った。

アスリートに学ぶ

日本のスポーツシーン、とりわけマラソンを語る上で、まず「貧しさ」というのが一つのキーワードになる。今から六十年以上前、現在のアメリカ以上に侵略国であった日本。この国に併合されていた朝鮮人の孫基禎（ソン・キジョン）は、占領国の「日の丸」を背負ってベルリンオリンピックで優勝した。祖国にとっては屈辱でしかないこの栄光は、朝鮮の新聞社「東亜日報」によって、「日章旗抹消事件」という形で表現された。これは表彰台の写真を新聞に掲載する際、意図的にユニフォームの「日の丸」を塗りつぶしたというもので、当時の朝鮮総督府は同紙を発行禁止処分、社長らを逮捕した。

そんな国レベルの思惑とは別に、ランナー孫はハングリースポーツとして「走る」ということを考えていたよ

うだ。朝鮮半島の北、平安北道の新義州で、貧しい家庭の四人兄弟の末っ子として生まれた孫は、小さい頃から走ることが好きだった。彼は常にひもじさを感じつつも、水で腹を膨らましながら走ったのだという。一昨年彼は他界されたが、生前次のように語っている。「いまはなんでも科学、科学といいよるがね、でもマラソンは科学じゃない。子供時代、ザトペックもアベベもみんな苦労した。みんなひもじい思いをしている。いいランナー、貧乏人じゃないと駄目よ」。因みにザトペックは一九五二年のヘルシンキオリンピックの覇者で、別名「人間機関車」と呼ばれ、アベベは一九六〇年ローマ、六四年東京オリンピック連覇のマラソンランナーである。

運動用の足袋を買う余裕も無く、「パンツひとつ」裸足で野原を走り回っていた少年たちが、晴れ舞台オリンピックで快挙を成し遂げる。この偉業こそがマラソンの醍醐味というものであろう。

翻って現代は、昔ほど貧しくはない。不況だと言われても餓死者が出るほどの状況ではないのだが、みんな心が「貧しく」なっている。人間関係や過度のストレスでゆとりがないのだ。

昨年の十一月十六日、東京国際女子マラソンで高橋尚子がまさかの二位に終わった。アテネオリンピックの選考会も兼ねたこの大会での敗退に、マスコミは苛立ちを隠さなかった。新聞の見出しには「高橋敗れる!」、「最後の望みは名古屋で!」という言葉が踊る。またこれが、当人にとってプレッシャーになる。

確かに当日は気温が二十五度と高温で、悪いコンディションだったせいもある。しかし問題は彼女のメンタリティーにあった。まず一昨年の同大会に出場予定だったのを直前に左肋骨の骨折で棄権していて、満を持しての出場であったこと。おまけにアメリカ・ボルダーでの高地トレーニングをみっちり行い、普段、大盛りご飯を三杯も食べる大食漢であるにもかかわらず、食物摂取ができないほど自らを追いつめていった。要するに気負うばかりに体重を絞りすぎて、スタミナまで絞ってしまった。その結果が三十キロ過ぎでの失速になったのだ。

自らも「日本マラソン界の至宝」と呼ばれながら、オリンピックで不本意な結果しか残せなかった瀬古利彦は、

この高橋の走りに自分の苦い経験を重ね合わせながら、「高橋を潰すな」と苦言を呈している。『週刊現代』2004年1月24日号。僅か四ヶ月後の名古屋国際女子マラソンに高橋がエントリーすれば、彼女はアテネどころか選手生命が終わってしまうと。

瀬古は一九八〇年のモスクワオリンピックの代表として選ばれながら、ソ連（当時）のアフガニスタン侵攻によって不参加を余儀なくされた。その後もオリンピックでベストコンディションを維持できず、八四年のロサンゼルスオリンピックで十四位。三十二歳で迎えた八八年のソウルでは九位と振るわず、オリンピックから見放された男になってしまった。

このような経験を持つ瀬古だからこそ、マラソンほど精神面が重要な競技は無いと言い切る。練習で毎日三十、四十キロと走っていても、選考がかかったレースの場合、選手たちの緊張は並大抵ではない。その不安を払おうとメニュー以上の練習をしてしまう。だから、選手やコーチには練習量をセーブする判断力が必要になってくるのだ。

また、マラソンランナーにとって、一年にベストな状態でレースに望めるのはたったの二回だそうだ。なんと極限の世界なのだろう。

とはいえ、シドニーオリンピックの金メダリスト「Qちゃん」に、「再びアテネでその雄姿を見せて欲しいと思うのは、私だけではないはずだ。陸連の勇氣ある裁量を待ちたい。

さて、現代のランナーとして、片や私と同世代である谷口浩美は、「朗らかランナー」と評されている。彼も宮崎県、小林高出身のエリートランナーで、日体大在籍中は箱根駅伝下りのスペシャリストと呼ばれた。同期の森下広一とともに一九九二年のバルセロナオリンピックに、翌九六年にはアトランタオリンピックに出場している。

そんな彼がなぜ「朗らか」なのかというと、彼はバルセロナでのレース中に給水所で転倒し靴が脱げてしまった。普通ならここで誰もがレースを諦めるところ、谷口はなんと靴を履きなおした。「転びながら素足で行こうか、と一瞬思いましたね。でもここは路面が固い。履かなきゃと思った。まだ二十キロあるぞとも……。」

この間、時間にして三十秒、距離にして百数十メートル。谷口は再び走り始めた。彼はレースを放棄する気持ち微塵も持ち合わせていなかったのだ。

結局、八位入賞でゴール。そしてレース後のインタビューで開口一番「こけちゃいました」。これが観衆に受けた。オリンピックの張り詰めた緊張を、谷口の笑顔は一気に和らげてくれた訳だ。

物質的な「貧しさ」と精神的な「貧しさ」。その逆境にアスリート達は打ち勝ってきた。そしてそのパワーを彼らに感じることで、人は勇気付けられるのだ。いくらオリンピックが汚職にまみれ、腐敗していたとしても、選手達の肉体と心までが腐敗しない限り、私も彼らのようにがんばろうと思う。

「走ることの意味」から十年を経て

今から十年前に、私は自分の倫理的な精神構造を改造しようと拙文を書いた。畏れながら自らをマラソンランナーの円谷幸吉になぞらえつつ、彼の良きライバルであったアスリート君原健二への憧れを綴ったものである。出場した三十五レース中、棄権がゼロという君原の生真面目さと、ストイックな円谷のそれとは、正反対で

あるようにみえる。しかし君原自身もまたプレッシャーに押しつぶされそうになりながら、それを乗り越えてきた。

右肩上がりの高度経済成長期、日本の「国体」を背負わされた最後の世代だといわれる君原と円谷であるが、スポーツがオリンピックという「国体」の手段とされている現状は、先ほどの「Ｑちゃん」しかりと、全く変わっていない。近代オリンピック発祥から百八年を経て、今年はオリンピックイヤーである。それも発祥の地アテネが舞台だ。

古代オリンピックの理想には程遠いが、スポーツが本来の意味での国際平和を訴える場として、奇しくもイラク戦争の泥沼化に抵抗するものであつて欲しい。

そして、あれから十年、私の何が変わったのか。まずは十年分、肉体的には衰えた。疲れが翌々日に持ち越すようになったことは先ほど書いたが、他にもむちやがでなくなつたと感じる人が多い。昨年は春先に膝を痛め、それを期にランニングを一時期、控えるようになってしまった。医者によれば、それは「変形性膝関節症」で、要は、加齢による軟骨の変性・磨耗が原因で大腿骨を痛めたのだ。現在ではほぼ完治しているが、これが進むと「関節炎」になって、それこそ走れない体になってしまうので、最近では運動前にストレッチを充分行うようにしている。

むちゃできないといえ、それは気持ちの上でも表れている。「無難に」というか、「当たり前障り無く」生きること、その術をどうも覚えてしまったようだ。

例えば、人間関係の軋轢を気にして、余り人の批判をしないと、自分の思っていることを直截に表現しないというようなことになってしまっている。これではまずい。精神的に萎えてしまっている。まだ若い頃、最も忌み嫌っていた「無難なオヤジ」に成り果てる前に何とかしたい。これが再びこのテーマで書くことにした理由だ。

そんな訳で今年年頭にあって、私は三つの目標を立てた。一つは通勤ランで月二百キロ（年間二千四百キロ）を走ること。そして二つ目は、来年までに念願の「サブスリー」を達成することだ。フルマラソンに出るには、少なくとも月三百キロ以上の走りこみは必要だろう。今年一杯、充分に基礎体力を付けていきたい。

もちろん、体力だけに止まらないで、気持ちの上でも萎えることなく青年性を保持していきたいと思う。正しいものは正しい。間違っているものは間違っていると主張できる気概を持つこと。これが三つ目の目標である。「無難なオヤジ」より、頑なな「スポーツオヤジ」になること。現状で、これが正しい道であると私は信じる。

私の人生の師、君原の近況でいえば、彼は還暦を前にしてなんと大型バイクを購入したそうだ。それもハーレーダビッドソン。その愛車を駆って四国八十八ヶ所参りも達成したと聞く。黒いジャンパーに身を固めた往年のアスリートというのも、カッコいいものだ。

その上彼は今も現役で、毎日のジョギングを欠かさない。「マラソンがあなたにもたらしたものはなんでしょうか？」という問いかけに対して、「いろんなことをもたらしてくれたように思いますよ。嫌なこともありましたが、全体としていえば、自分の人生を豊かにしてくれたものだと思います。少年時代、劣等感の塊のような自分に目標というものを与えてくれた。それが一番でしょうね。マラソンは私にとって人生の道場だったのではないでしょうか。」と語っている。私も人生を振り返る時期になったらこう言えるように、精一杯今日を生きようと思う。冬の早朝は周りが凍り付いてみえるほど寒い。吐く息の白さに驚き、頬や耳をかすめる木枯しに目を細めながら、今日も私の通勤ランは続くのであった。

(2004.01)